

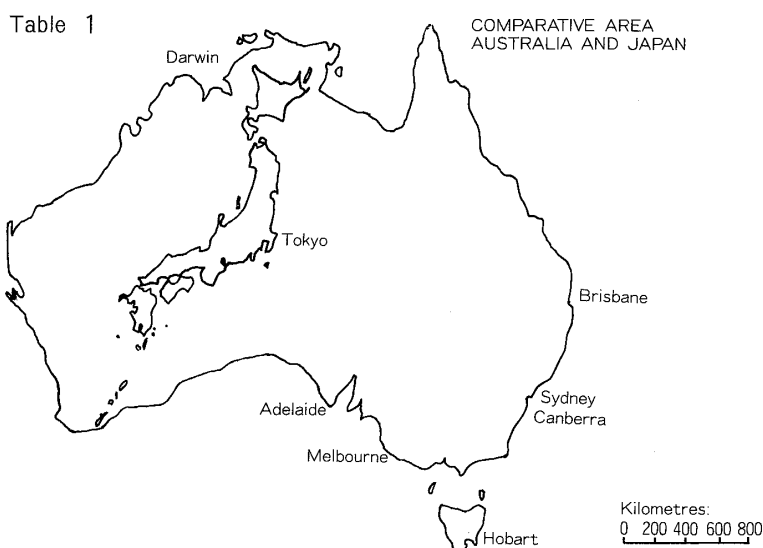
オーストラリアの言語と文化

赤坂 和雄

一、はじめに

昨年(一九八八年)、オーストラリアでは建国二百年の祝典が大々的に行われた。総督フィリップ以下七百余名の囚人を含む千三十名の生活が今日のSydneyで始まったのは一七八八年一月のことである(1)。その後移民が増加し、現在では千六百万人も人口を形成するに至った。Tableでもわかるように日本の二十一倍もの土地面積を持つ広大な国に、何んと、日本の四分の一ばかりの人口しか持たない国である。しかも地下資源が豊かで、自然にも恵まれ、現在では多数の日本人の憧れの国ともなっている。

オーストラリア大陸の最初の住人であるアボリジナルを語らずして、オーストラリアを論ずることは出来ないが、本稿ではオーストラリアの歴史的背景をふまえ、現代のオーストラリアの言語と文化に焦点をあて、多民族国家になってきた言語の移入と文化の関係を論じてみたい。



二、オーストラリアへの移民

一七八八年、オーストラリアへの移民が始まり、約百五十年間の一九四〇年頃迄は移民の九八%をイギリス系、アイルランド系で占められていた(2)。しかし、その後から現代に至り入植者に大きな変化があった。アジア系の移民が増加してきたことである。ちなみに、著者がオーストラリア滞在中、友人になった多くの人たちが外国生まれのオーストラリア人であった。人口千六百万人の二割が外国生まれで、その二割の内訳は、イギリス、アイルランド系が四割弱、アジア系が二割ちかくまで占めている(3)。

一九七〇年代になり、オーストラリアは世界各国に門戸を開き、移住者に差別しない政策をとるようになった。現在のオーストラリア入植者は九十四カ国にまでのぼっているとのことである。地域によっては異なるが、移民者で目立つのはイギリス、アイルランド系を除き、ギリシャ、イタリア、中国、ユーゴスラビア人等である。メルボ

Ethnic Composition Of Victoria's Population

Table A.1 Place of Birth of Victoria's Population, 1981 Census	
Birthplace	Percentage of Population
Australia (including those Aboriginal and Torres Strait Island descent)	76.3
Overseas Born	22.8

Table A.2 Birthplace of Overseas Born

Birthplace	Percentage of Overseas Born
UK & Ireland	29.8
Austria	0.8
Czechoslovakia	0.6
Germany (GDR + GFR)	3.9
Greece	8.3
Hungary	1.0
Italy	13.2
Malta	3.2
Netherlands	3.5
Poland	2.6
Spain	0.5
USSR	1.1
Yugoslavia	6.8
China	0.6
Cyprus	1.2
India	1.4
Lebanon	1.2
Malaysia	1.1
Sri Lanka	1.1
Turkey	1.4
Vietnam	1.5
Egypt	1.3
Canada	0.4
USA	0.8
New Zealand	3.3
Europe N.E.I.	2.7
Asia N.E.I.	2.9
Africa N.E.I.	2.0
America N.E.I.	1.3
Oceania	0.5

Note: N.E.I. is an abbreviation for Not Elsewhere Included.

ルンの都心に近いカールトン(Carlton)はイタリア人の店や人で賑わっている。また、やはり都心に近い地区にヴェトナム人街が存在し、友人が、ここはサイゴンだと冗談を言う程の町並にまで形成されている。最早、オーストラリアはアメリカのように、地球上に存在するすべての人種が交り合う国にでもなってしまうのではないか、という気さえする。アメリカは地球上に存在するすべての人種が居住する、人種の標本国であると言われているが、オーストラリア

の場合もその可能性がないでもないようにかがわれる。オーストラリア国民にでさえ、異常なまでの変貌には目を見張るものがあると思われる。しかも当初の差別どころか、アングロサクソン系白人国として自認していた彼らが、異国文化の混合を歓迎さえしているのである。まさに、今日のオーストラリアは白人国から多元的な Ethnic 文化へと転換が余儀なくされている。

一九八五年、State Board of Education

が文部省に提出した、一九八一年度のヴィクトリア州人口国勢調査によると、オーストラリア生まれは七六・三%、海外生まれは二二・八%である。

Table A.2でわかるように、ヴィクトリア州に於ける海外生まれの入植者は、イギリス、アイルランド系が三割を占めている。それに続き、イタリア人が一三・二%、ギリシャ人が八・三%、ユーコスラビア人が六・八%と、他の二十六カ国の入植者を引

き離している。

三、オーストラリアの言語

九十四カ国もの異国人同志が居住するとなれば問題になるのが言語に関することになる。これは多民族国家がもたらす多様文化と多言語問題につながる。

Australian Bureau of Statistion(オーストラリア統計局)によると、オーストラリア全土で、ヴィクトリア州ほど英語以外の言語 Languages Other Than English (以下LOTEと呼ぶ)が使用されている州はないと述べられている。十五歳以上のオーストラリア人口のおよそ一七%の人がLOTEが第一言語になっていると推定されるが、ヴィクトリア州の場合は二二%にもなっている(4)。

Table Bはオーストラリアに於ける言語の多様性を物語っている(5)。

その結果、ヴィクトリア州に於ける学校教育がLOTE教育も辞さないことになる。一九八四年度ヴィクトリア州文部省異人種教育調査によると、公立学校生徒の二五%がLOTEを背景に持つ家庭からきてると発表している。これがSecondary School(以下高校と呼ぶ)課程になると、LOTEを持つ者は三人に一人の割合にまでなっている。

しかし、私立学校になるとこの割合はもっと異なってくる。カトリック系の私立学校などでは、一九八三年の調査によると、小学校に四〇%、高校課程になると三七%の生徒がLOTEの持つ家庭の子弟である。従って、これらの学校では多種多様の言語が入り乱れていることがわかる。

最近では、これらの言語事情がオーストラリア国民にも大きな、しかも重要な影響を与えてきた。勿論、英語は国際的にも、貿易、商業部門では重要な言語であることは言うまでもないが、それと同時に、オーストラリアの利害関係等を考え、LOTEにも精通することが叫ばれるようになってきた。オーストラリアは英語国以外の国々か

Table B Number and Proportion of Persons Aged 15 years and Over Speaking a Non-English Language as a First Language in Australia in 1983

State/ Territory	Non-English Speakers aged 15 years and over		Non-English Languages spoken as a first language by at least 1 % of the State/ Territory population
	Number	Percentage of State/ Territory Population	
NSW	732,000	17.1 %	Arabic, German, Greek, Italian, Yugoslav languages.
Vic	678,000	22.1 %	Chinese languages, Dutch, German, Greek, Italian, Maltese, Polish, Yugoslav languages.
SA	174,000	16.7 %	Dutch, Italian, German, Greek, Polish, Yugoslav languages.
Old	167,000	9.3 %	Dutch, Italian, German,
WA	119,000	14.0 %	Dutch, Italian, Yugoslav language.
NT	28,000	27.7 %	Aboriginal and Chinese languages, Greek.
Tas	13,000	4.1 %	

Table C Provision of Language Programs for Victorian School Children

Course Provider	State Schools			Non-State Schools		Ethnic Schools
	Primary	Post- Primary	SSML	Primary	Post- Primary	
Language						
Albanian			★			★
Ancient Greek				★	★	
Arabic / Lebanese	★	★	★	★		★
Aramaic						★
Armenian						★
Cambodian / Khmer	★					★
Chinese languages	★	★	★	★	★	★
Croatian	★		★	★		★
Czech			★			★
Dutch			★	★	★	★
Estonian			★			
Finnish						★
French	★	★	★	★	★	★
German	★	★	★	★	★	★
Hebrew	★			★	★	★
Hindi						★
Hungarian						★
Indonesian		★	★	★	★	★
Italian	★	★	★	★	★	★
Japanese		★	★	★	★	★
Korean						★
Latin		★		★	★	★
Latvian			★			★
Lithuanian			★			★
Macedonian	★	★	★			★
Maltese	★		★	★		★
Modern Greek	★	★	★	★	★	★
Polish			★	★	★	★
Portuguese						★
Russian		★	★		★	★
Serbian	★					★
Serbo-Croatian	★					★
Slovak			★		★	★
Slovenian			★			★
Spanish	★	★	★	★	★	★
Swedish						★
Syrian						★
Tamil						★
Turkish	★	★	★			★
Ukrainian	★		★		★	★
Vietnamese	★		★	★		★
Yiddish				★		★

Note : a detailed breakdown of number and range of language courses offered by different groups of schools is presented in Appendix B.

らの観光客、移民者で大変な数になっている。特に日本からの観光客は大歓迎されている。メルボルンの一流ホテルなどでは日本人観光客がない日などは、ホテル内は閑散としているとまで言われている。

四、ヴィクトリア州の言語対策
ヴィクトリア州の小学校から高等学校における言語教育プログラムの開発と発展は、生徒の中にいる異人種の持つ多くの言語、言語技能等の影響が非常に大きい。Table 6でもわかるように移民の数、言語の数の広がりも途方もなく大きく思える(6)。

このヴィクトリア言語教育プログラム対策で教育されている言語は四十二カ国語が示されているが、中国語の場合、北京語、関東語など他の方言も加えられるのでその言語数は四十五カ国語以上にのぼっている。このTable 6でわかることは Ethnic Schoolsで自分達の言語教育がなされてい

るのは当然なこととして、公立学校と私立学校での教育に差がある。公立小学校でLOTE教育が行われているのは十六、私立校では十八の言語教育が行われている。また、公立高校では十三、私立校では十六と
 いうように、LOTE教育は私立系の学校で

の方が多少多くなっている。

一方、小学校に於ける外国語教育プログラム(英語以外の言語:LOTE)を考えてみる。ヴィクトリア州の小学校は、公立、カトリック系、他の宗教系の学校に分けられ

るが、その総合的な見方をしても、イタリア語百三十六、現代ギリシャ語三十一、フランス語十八、ドイツ語十六、スペイン語十四、アラビア語十、ヘブライ語十などの学校でそれぞれの言語教育が行われている。尚、ヴィクトリア州に於ける中高校での

Table D Number of Post-Primary Schools Offering Language Programs

Language	State Secondary Schools	State Technical Schools	Saturday School of Modern Languages	Corres- pondence School	Catholic Secondary Schools	Independent Secondary Schools
Aldanian			1			
Ancient Greek						1
Arabic	1	2	4			
Chinese	14		6		1	9
Croatian			8			
Czech			1			
Dutch			3			3
Esperanto					2	
Estonian			1			
French	204	1	4	1	75	73
German	109		4	1	23	38
Hebrew						5
Hungarian			3			
Indonesian	41		5	1	14	24
Italian	67	9	9	1	77	7
Japanese	16	1	2		5	10
Latin	6				9	19
Latvian			1			
Lithuanian			1			
Macedonian	1		5			
Maltese		4	4		1	
Modern Greek	32	3	13	1	3	9
Polish						
Russian			2		1	
Serbian	2		4			4
Serbo-Croatian			6			
Slovak			1			
Slovenian			1			
Spanish			5			
Turkish	10	1	5		6	
Ukrainian	2	7	8			
Vietnamese			1			
General Languages	37		4		13	4

外国語教育をみるとTable Dのようになる(7)。

上記のTable Dからもわかるように、フランス語、ドイツ語を教えている学校が圧倒的に多いが、その数は段々減少ぎみにあるとのことだ。これは両国の対外的、経済、貿易等の関係によるものと推察される。

しかし、Ethnic School Programs(8)の生徒数を見ると、Table Eのようになり、ギリシャ人の数が圧倒的に多く、次に中国人、

Table E Ethnic School Programs
Number of Students and Organisations Involved
in Ethnic School Programs

Language	Number of Students	Number of Organisations
Albanian	111	1
Arabic	1677	13
Aramaic	56	2
Armenian	165	2
Cambodian/Khmer	175	2
Chinese	3304	12
Croatian	1281	10
Czech	26	1
Finnish	47	2
French	14	1
German	212	5
Greek	12779	71
Hebrew	546	3
Hindi	10	1
Hungarian	142	2
Indonesian	82	2
Italian	2116	4
Japanese	40	1
Korean	45	1
Latvian	99	1
Lithuanian	41	1
Macedonian	1014	5
Maltese	160	1
Polish	476	5
Portuguese	148	4
Russian	164	2
Serbian	184	5
Serbo-Croatian	317	3
Slovenian	102	5
Spanish	775	9
Swedish	39	1
Syriac	32	1
Tamil	41	1
Turkish	1458	24
Ukrainian	423	1
Vietnamese	605	7
Yiddish	31	1

イタリア人、アラビア人、トルコ人、クロワチア人、マケドニア人の順になっている。Table Dでのフランス語、ドイツ語を教えている学校数から見ると、実際にEthnic Schoolでのフランス人、ドイツ人の数が極端に少ないことがわかる。

これらヴィクトリア州に於ける言語事情はすべて世界各国からの移植者によることが理解出来る。今や、オーストラリアはこの広大な国土に、より以上の人間が必要なのである。ブリスベーンの友人によると、

オーストラリアは世界各国からの移民を歓迎してはいるが、特にイギリス、アイルランド系等、英語圏の白人を増加させたい意向があるらしく、彼らにはオーストラリア迄の旅費まで支給しているとの事である。オーストラリアは、これまででも人口増加を考えなければならぬ事情にあるようだ。

五、流入するの日本語
さて、オーストラリアの日本語事情がど

うなのかを考察してみたい。

日本語の場合は他の言語事情とかなり異なるようだ。今迄述べてきたオーストラリアの言語事情は資料が一九八五年までのものであったが、昨今のオーストラリアに於ける日本語事情は今までの資料とはかなり異なってきた。

言語の流入は、人が運んで来るのが定説であるが、日本語の場合は日本人その者がオーストラリア国内に持ち込んだのではないと言うことである。要するに、他の言語とは異なった方法で日本語がオーストラリア国内に流れ込んでいるという見方が出来る。これは、かつて日本に英語が入ってきたのに似ている。

日本経済力の進出が言語と文化をも持ち出しているということになる。彼らにとつての初めての日本語は、トヨタ、ダットサンとか、ソニー、ヤマハ等であった。それがいづの間に、イケバナ、アイキドー、スキヤキに至り遂に日本語に到達したのである。こう考えてみると、海外への日本語流出は大部分がこの様な経路で伝わり始めていると言っても過言ではあるまい。

六、オーストラリアの日本語教育

海外での日本語教育が叫ばれるようになったが、オーストラリアも例外ではない。一九八九年度の日本語科を持つ大学 Technical Schools

については、この教室も定員オーバーで、あちこちの学校では何十人もの学生がウェイトイングの状態である。この日本語学習者の増加は年々その状態ではあったが、今年などは昨年度などに比べてダントツであるとのことである。今まで教育を受けるのにお金を払ったことのなかったオーストラリア人が、日本語学習に高い授業料を払い、しかも、昼の長い勤務後の夜の日本語教室に通い始めたのである。メルボルンにある日本領事館の Japan Information Service でも日本語教室を開講している。今年は大学、Technical Schools と同じように応募者が多く、日本語初級クラスには三十人以上もの生徒が詰めかけ、ムンムンした熱気の中で学習していたのは印象的であった。

ヴィクトリア州では Foreign Language Assistants という制度があり、小生がメルボルン大学で日本語を教えていた折、その三人のアシスタントに会うことが出来た。これは現在日本で行われている英語助手と同じような制度である。アシスタントの仕事はメルボルンの高校の日本語教師の手助けをすることで、実際には単独では指導にあてられていない。あくまでも正規のオーストラリア人日本語教師の助手であり、インフォーマントとして使われているのが多いようである。とは言え、オーストラリア

人日本語教師にとつて、彼らの存在が非常に有用で大きいことを知った。彼らは正確な発音、表現法、教材作り、などに大きな貢献をしている。そしてオーストラリア人の日本語教師自身にとつても、日本語のネイティブスピーカーと日本語で話し合える等、その存在価値は大変大きいようである。しかし残念な事は、

① ヴィクトリア州に於ける日本語学習者、学校数に比べて三人のアシスタントは余りにも少な過ぎる。

② これらのアシスタントは正規の日本語教師としてクラスを任されていない。などが上げられる。

②の問題はオーストラリアの教育制度にあるのは非常に残念である。オーストラリアで高校の教師をするには、日本の大学で教職免許を取得した人であれ、誰でもオーストラリアの大学で Diploma of Education (オーストラリアに於ける教員免許証) を取得しなければならぬ事である。これには彼らなりの理由があるのであるが、オーストラリアに於ける効果的な日本語教育を遅らせている一つの原因にもなっているのではない。

その理由のひとつに考えられるのは、十二・三歳から十五・六歳までの生徒を英語でコントロールしながら授業を進めるには、かなりの英語運用力に精通していなければ

ならないからかも知れない。実際、授業参観した折、日本語担当のMs. Kim(8)が「クラスでは、私は人が変わったようになるかも知れませんが気にしないで下さい。」と言われた。後でわかったことだが、確かにざわざわした四十名ちかい生徒をうまくコントロールしながら授業を進めていくのは特に若い日本人にとっては至難の業であることを知った。

一九七五年にオーストラリアの六州と二地域において、八千名以上の人、つまりオーストラリアの人口一万人当り五人以上が日

Table F

Y (学年)	1985	1986	1987
9	1433[3%](37)	1680[4%](42)	na
10	1044[2%](35)	1175[2%](37)	1295[3%](43)
11	306[1%](27)	437[1%](31)	479[1%](33)
12	178[1%](23)	256[1%](25)	422[2%](32)
合計	2961 (37)	3548 (42)	2196 (43)

* na 1987 Year 9 の資料なし。 [%]:生徒数全体をしめる割合
():学校数。Year 8 の資料なし。

本語を学習していた。国際交流基金のその前年の統計(Bunkacho 1975)を絶対数から相対数に換算すると、人口当りでは、オーストラリアが世界で一位を占め、二位は南朝鮮、三位はアメリカという順になっている(9)、ということだそうだが、今日では一万人当りの日本語学習者数が今まで述べてきたことから察すればかなり高くなっていることは容易に想像出来るであろう。

オーストラリアに於ける日本語教育の特徴はNeustupny氏が述べておられるように(10)、日本語学習者数を大量に伸ばしているのは、高校で日本語教育を取り入れたからである。川越菜穂子氏のクイーンズランド州での調査(11)でもわかるように、確かに高学年になるにつれ、日本語学習数は減少にあるが、そのすその広がり大きいことを感じる。底辺が広がれば広がる程、ピラミッド型になると考えれば、たとえ先細りがあつたとしても、日本語の市民権が十分に得られたことになるのではないだろうか。

最後に

海外での日本語教育の盛況を良く耳にするが、多くの場合、大学レベルで行われているのが普通であるが、オーストラリアでは、高校どころか小学校でも実験的に日本語教育が始まっている(12)。これは前にも述べたことだが、かつて、日本に英語が入っ

てきたのどこか似ている。日本人にとっては、日本人教師が英語を教えていると言つてもさほど妙には聞こえてこないが、オーストラリアではオーストラリア人が日本語を教えていると言われて驚く日本人が多いというのも不思議なことではないだろうか。

オーストラリアで日本語を学ぼうとする人たちが大変多くなっているというのに、ネイティヴスピーカーである日本人教師を大量に派遣出来ないのは非常に残念なことである。これにはオーストラリア各州の文部省も日本人日本語教員採用の特別事情を考慮し、オーストラリアに於ける日本語教育の発展を速やかに進める対策を講じることを切に願うものである。

最後になりましたが、今回の小論を書くに当り、種々のご指導、資料をいただいた Ministry of Education, Victoria の文部省 外国語教育部長 Ruben Ketchell 氏、University of Melbourne, East Asian Studies の Dr. Garner, Ms. C. Sherriff, Australian National University, Japan Center の Dr. A.E. Backhouse, University of Queensland の Dr. Brandle, Lecturer H. Uchiyama, Ms. K. Griffiths, Swinburne Institute of Technology の Sener Lecturer Nao Fukushima, International College of

Englishのベアトリス氏、加藤久美氏、尚メルボルンでの高校での日本語クラスを心良く参観させていただいた Montmorency

Secondary College の日本語アドヴァイザー McShane, Ms. K. Aitchson, Principal J. Wilson, また高校での日本語クラス参観

のアレンジの労をいとまなかった日本語教育アシスタントの浜橋昌子氏の皆様には心からお礼申し上げます。

《参考文献》

- (1) 山崎真純 「オーストラリア二百年の言語史」月刊言語Vol.10, No.12, 1988
- (2) ibid
- (3) ibid
- (4) State Board of Education, Report to the Minister for Education, The Place of Languages other than English in Victoria Schools, Melbourne July 1985
- (5) ibid
- (6) ibid
- (7) ibid
- (8) Montmorency Secondary College の日本語アドヴァイザー
- (9) J.V.Neustupny, 「オーストラリアの中等教育における日本語教育の現状と問題」日本語教育三十号、一九七六
- (10) ibid
- (11) 川越菜穂子, 「オーストラリアの日本語教育」日本語教育六十七号、一九八九
- (12) Melbourneの二小学校で始めた